

■二木長嘯 飛騨高山商人。奇石・心学等何事にも優れ、都の一流文人と交流して町人文化を振興、天明期ならではの人物。

にきちょうしょう

自然真営道・1755＝ 高山三之町で、造り酒屋6代目二木安純の長男に生まれる。

幼少から学芸を好み、

大岡忠光没・1760＝ 5歳：

赤田臥牛に漢詩を学び、尾張藩儒松平君山にも師事。特に、絵に優れ、

千代女句集・1764＝ 9歳：「飛騨十景図」を描き、出来栄えに驚いた町人が加賀千代に画讃を依頼、跋も江戸の一流俳人が認める。

一流の文人・画人と交流する一方、

御蔭参流行・1771＝16歳：池大雅に飛騨の産物を贈った礼にそれらを描いた絵を受取る。＊各地の弄石家との交流を始め、

田沼意次老中1772＝17歳：

大原騒動・・・1773＝18歳：

とくに近江の木内石亭と親交を持ち、

大田南畝・滝沢馬琴・木村兼葭堂らも交流して、高山と江戸・上方を結ぶ媒介者となる。

天明大飢饉始1782＝27歳：この前後、白川郷で天然痘が流行した際には、密かに都に人を遣わして薬の調合を頼み、人々に施す。

田沼意次失脚1786＝31歳：以後、3年かけて、「二木家家訓」を著す。

異学の禁・・・1790＝35歳：この頃、＊「陰陽録」を読み、以後、心学にも傾倒。

混浴禁止・・・1791＝36歳：この頃、伊勢長島に塾居していた木村兼葭堂のもとに出かけたり、

ヲクスマン来日・1792＝37歳：この年、石亭に神代石の製作や用途問題を論じた書状を送ったり、

松平定信引退1793＝38歳：

石亭からの書状で、“海内一”と称揚されるなど、神代石収集家として名を成すに至る。

江戸時代の著名な弄石家の収集品がほとんど散逸してしまっているなか、当時、神代石として珍重された石器類がまとまって存在する例は稀有であり、わが国の黎明期の考古学を考える上で貴重な事例である。

伊能測量始・1800＝45歳：

間宮海峡発見1808＝53歳：＊他の旦那衆と協力し、資金を出し合って、河内路最大の難所部分に新道を開削。克明な工事記録を残すとともに、これを素材にした架空の物語「遊紫霄巖記」を著す。

浮世風呂・・・1809＝54歳：

高田屋拿捕・1812＝57歳：この年、榊原郡代が京都から著名な心学者脇坂義堂を招いて領民に講話を聞かせたことに触発され、自ら飛騨各地に心学講話に出始め、

浮世床・・・1813＝58歳：1年間に61回の講話をし、「講席日記」を遺して、

黒住教・・・1814＝59歳：没した。

「人づくり風土記(岐阜)」